戦争と平和の資料館
ピースあいちニュース
第20号
2015年8月1日発行
〒465-0091
愛知県名古屋市名東区
よもぎ台2丁目820
電話・FAX 052-602-4222
発行:戦争と平和の資料館ピースあいち　http://peace-aichi.com/　【定価:30円】

開催中 戦争と若者

没後70年
竹内浩三の詩とその時代

｜ピースあいち企画展｜

7月21日（火）～8月30日（日）

＊期間中は日曜日も開催します。（月曜休館）

大人500円　小中高生200円（入館料を含む）

資料提供:本居宣長記念館（松阪）

入隊直前に「戦死やあわれ　兵隊の死ぬるや　あわれ」と詠み、23歳で戦死した、詩人・竹内浩三。詩・漫画・小説・日記を遺して、アジア・太平洋戦争の末期、フィリピンで命を失いました。

戦後70年を迎えた、今年の夏企画は、彼が遺した作品を通して、戦争とは何か、軍隊とは何かを考え、今の日本を見つめ直し、若者と戦争を問う企画です。

竹内浩三は、伊勢で生まれ、少年時代から漫画や文を創作し、表現する喜びを感じていました。映画芸術を目指し、東京へ出て学び、さらに読書・音楽・演劇へと視野を広げました。やがて兵士になりますが、兵舎の中でも創作は止めませんでした。

戦場に征く前に、多くの作品を姉（松島こう）に託し、戦場へ立ちました。作品・遺品は戦後、本居宣長記念館（松阪）に寄贈されます。

この企画展では、「筑波日記」「伊勢文学」「手紙」など、貴重な遺品を展示します。ほとばしる青春の喜びと、戦争を厳しい眼で見つめ、苦悩する作品や手紙を、浩三の直筆でみることができます。

【展示内容】筑波日記など遺品40点他、総展示数100点

序 竹内浩三の生い立ちと時代

第1部 「五月のように」から「骨のうたう」へ　「骨のうたう」「日本が見えない」ほか青年時代の代表作を展示

第2部 兵舎からうたう　「兵営の桜」「望郷」「わかれ」ほか久居の連隊で書いた詩を展示

第3部 ぼくの戦争が書きたい「筑波日記」　筑波の挺進部隊で密かに書き綴った200余日の軍隊日記を展示

第4部 浩三が書き遺せなかった戦場　アジア・太平洋戦争の戦場、浩三が戦死したルソン島の戦場を展示

第5部 浩三と友人・家族たち　友人や家族と共に生きた浩三23年の人生を展示

第6部／浩三の遺品　少年時代に描いたまんが、余白に詩が書き込まれた愛読書、多くのはがき、手紙、着物など遺品多数を展示

関連イベント

＊いずれも「ピースあいち」にお申し込みください。

●竹内浩三の詩に作曲をして歌うミニコンサート

岩瀬よしのり ソロライブ

「竹内浩三の世界」

8月2日（日）14:00～15:00
ピースあいち1階
参加費200円
（小中高生無料、入館料別途）

●Special Event

『ぼくもいくさに征くのだけれど 竹内浩三の詩と死』著者による特別講演会

「竹内浩三とわたし」

8月22日（土）13:30～15:30
ピースあいち1階
講師　稲泉　連（ノンフィクション作家）
参加費700円
（小中高生無料、入館料別途）

開催中

「15歳の語り継ぐ戦争―金城学院中学生の壁新聞と平和かるた」展

7月21日（火）～8月30日（日）

金城学院中学3年生の修学旅行は広島への旅。語り部のお話、戦跡めぐり、広島の中高生との交流・被爆ピアノの演奏会。その中で見たこと・聞いたこと・感じたことを一人ひとりが一枚の壁新聞と「かるた」に表現しました。「私たちは、戦争を体験した方から実際にお話をお聞きすることのできる最後の世代です」と、祖父母から聞いた戦争体験を書き綴った作品もあります。中学生が語りつぐ「戦争の記憶」は、夏の「ピースあいち」の常設展となりました。

2014年の展示の様子

これからの催し

美術展「peace nine 巡回展」

9月8日（火）～9月26（土）

秋の恒例となった美術展「peace nine 巡回展」。本展は、6月末に北名古屋市の名古屋芸術大学で行われました。集団的自衛権の行使容認、憲法解釈が議論されるさなか、自問しながら制作にあたった学生たちの作品が並びました。主催者peace nine 実行委員会は、「誰かの痛みを想像し、これからの平和な未来をつくっていくために」「憲法の理念と共に、出品者一人ひとりの平和への想いが皆様のこころに響くように」と、メッセージします。

ピース コンサート 2015

9月19日（土）　開演: PM 4:30

場所:ピースあいち1F　入場無料

毎年大好評の名古屋二期会のメンバーの皆様によるサロン・コンサート。今年は、前半のステージでは本格的なオペラを中心にアリアと重唱をたっぷりと、後半にはわかりやすい「日本のうた」を集めたプログラムです。名古屋二期会アンサンブル研究会は数々のオペラの場面からアンサンブルを中心にして研究をし、また「日本のうた」からポピュラーまで幅広いレパートリーを得意としているメンバーです。ご家族、お友達、お誘いでお出かけください。

「戦争の記憶」戦時資料・作品募集状況

平和な世界をつくりたい。それは、戦争の実態を知り、学ぶことから始まります。過去の戦争の人やモノにまつわる記憶は、そのための教材です。「ピースあいち」では「戦後70年―聞こう、語ろう。戦争のこと・平和のこと」というタイトルのもと、「戦争の記憶」として、戦時遺品などの募集を行っています。

6月末日現在、63名の方々から寄贈や作品の応募がありました。内訳は、戦時遺品など80点。小学6年生が学徒出陣について壁新聞にした「ひいおじいちゃんと戦争の悲しみ」など、身近な方からの戦争体験の聞き取りレポートが24点。海軍飛行予科訓練生だった方からの「絵日記　子供の海軍さん」（B4判37枚組）などの戦争体験記（談）、体験画が28点。戦争と平和をテーマにした絵画、短歌、小説などの作品23点という状況です。

応募いただいた作品や戦時資料は12月8日から開催予定の企画展で、紹介させていただきます。応募の締め切りは9月末までですので、皆様も戦時遺品や作品などがありましたら、ご協力いただきますよう、お願い申し上げます。

▲応募作品から

7年目を迎えた「ピースあいち語り手の会」の活動

「ピースあいち語り手の会」は2009年7月に発足しました。その主な事業は、平和学習支援事業の他に、毎年8月1日から15日までの間、10名の語り手に語っていただく「夏の戦争体験を語るシリーズ」および愛知県下の小中学校や各種団体からの要請に基づく語り事業の三本の柱を中心にして行ってきました。

この間、2014年末までの語り手の派遣数は延約350名、体験を聞いた聴衆は約25,000名に達しました。

会が発足して丸6年が経過し、語り手の高齢化も進みました。現在、語り手の年齢構成は父の戦争体験を語り継いでおられる62歳の女性から、最高齢は101歳の戦場体験者まで総勢69名となっています。2010年3月時点での平均年齢は80.5歳でしたが、2015年6月時点では82.7歳となりました。

体験者数のこれまでの経過を見ると、死亡者15名、退会者30名、新規加入者27名となっています。退会者の退会理由はいずれも高齢化に伴う体調の衰えをあげておられます。

6月29日には第7回目の「語り手の会」総会を開催しました。27名の方々にご参加いただき、本年度の活動方針などについて協議しました。語り手と事務局の高齢化に伴い、語り手を現地へ派遣する事業を一時中断していることについて活発な意見があり、何としても再開する方向で検討することとしました。また、語り事業を円滑、効果的に実施するためには、あらためて研修会を開催してほしいとの意見や、懇親会開催の要請もありました。この他にも、出席者の皆さんには全員一言ずつ発言いただきました。

なお当日は、南山大学4年生の安藤麻衣さんに特別参加をいただき、「ピースあいち」を題材の一つにし、卒論のテーマとして戦争体験の継承について取り組んでいるその動機と意義、方法について報告していただきました。若い人がこうしたことに関心を持ち、取り組んでいる姿に参加者の皆さんが勇気づけられました。

「ピースあいち」での語り

「語り手の会」総会

2015年　夏の戦争体験語りシリーズ

本年は終戦70年の節目の年。「ピースあいち」は、本年のテーマを「戦後70年―明日へつなぐ平和」として各種の事業に取り組んでいます。

先の大戦では、20歳前後の多くの若者たちが戦場に送られました。彼らはいまや90歳前後に達し、その体験を語る限界に近づいています。そこで、今年はテーマを「戦場体験」に絞って取り組むことにしました。

月日	語り手	年齢	体　験　の　概　要
8. 1（土）	上野　三郎	101	扶桑丸乗船撃沈、マニラ戦線
8. 4（火）	江口　　勉	94	第三師団中国派遣軍、抑留
8. 5（水）	加藤　英男	94	元船舶工兵32連隊小隊長、捕虜
8. 6（木）	河村　廣康	91	シベリア抑留、引き揚げ
8. 8（土）	諸井　　進	89	駆逐艦「時雨」でレイテ沖海戦参戦、南シナ海で撃沈
8.11（火）	田辺登志夫	86	海軍志願兵、厳しい軍隊生活
8.12（水）	中野　　巌	87	海軍航空隊整備術練習生、厳しい軍隊生活
8.13（木）	鈴木　忠男	89	陸軍無線通信候補生の記録
8.14（金）	原田　久史	93	戦艦大和でレイテ沖海戦参戦
8.15（土）	竹内　豊彦	93	海軍入隊、ラバウルでの戦闘

●実施日　8月1日（土）～15日（土）中の10日間
●時　間　午後2時～3時　●会　場　ピースあいち1階
＊入館料（大人300円、小中高生100円）でご参加いただけます。

平和へのメッセージ

今年は、この国での最後の戦争が終わって70年という節目の年です。この70年はどのような歳月であったのか。マスメディアは、先の戦争を体験した方々の証言を紹介し、その歴史の検証を伝えています。

私たちは、この歳月を単に回顧するに止まっていてはなりません。安倍保守政権は、平和憲法で「戦争をしない」と決めたこの国を、外国の戦争に荷担し「戦争ができる」国につくり変えようとしているからです。こうした状況のなかで、今日的な課題をテーマとする芝居を企画し舞台に乗せてきた演劇人の方々に、平和への思いを語っていただきました。

平和を子どもたちにつなぎたい

安藤　明日香
（愛知・県民の手による平和を願う演劇の会・略称「平演会」会員）

私が平演会に入会したのは高校生の時です。毎年1回終戦の頃に平和をテーマに公演をするという活動に20年以上も関わっています。就職・結婚・出産という、一般的には演劇が続けられなくなるような岐路がありましたが、運良く続けられ、下の子が1歳の時は、舞台上で授乳しながらお芝居をしました。

私は1973年生まれです。戦争体験を聞くことはとてもしんどいので、せめて平演会で活動することで、戦争のことを学び、お芝居という形でお客様に観ていただくことを続けてきました。それによって、私の子どもをはじめ、兄姉の子、友人の子らにもお芝居を観てもらって平和の思いを伝えていけていることに喜びを感じています。なかには平演会に入りたいと言ってくれる子もいて、活動を続けていて本当によかったと思っています。

今年の平演会の公演は、1982年に瀬戸内海の小島の対岸に原子力発電所を建設するとしてから、週に1度、島内で建設反対デモを続け、建設を阻止している島民の物語です。今年も3歳と5歳の子を連れて私も参加しています。戦争反対の世論が多ければ戦争は止められたのかも、また、子どもたちには平和で核のない安全な社会を贈りたいという思いに駆られながら稽古をしています。公演は8月8日（土・14時・18時30分）、9日（日・14時）に、東文化小劇場であります。ぜひお越しいただければ幸いです。

「原稿が書けない」

菊本　健郎
（劇作・演出）

たかだかペラ3枚の原稿にこれほど苦しんだことは、今まであまり記憶にありません。決して嫌だったのではありません。「ピースあいち」の皆様の活動に、怠け者の私はずっと頭の下がる思いがしていました。それなのに、どうして書けないのか、自分でも苛々する日々が続きました。

私はこれまで「戦争という悪に翻弄される人々の物語」を演劇という手法で綴ってきました。いずれも未熟な劇作・演出ではありましたが、それなりにお客様の共感も得られ、過分なお褒めの言葉も頂戴いたしました。しかし現在の私は、演劇の現場から少し距離を置いた日々を送っています。その理由のほとんどは、全く個人的なことでありますが、ささやかな要因として、この原稿をすんなり書けなかったこと、にも関連があるのかもしれません。これまで私は思い上がっていました。内容の巧拙はともかく、自分の作る芝居が、たとえほんの僅かでも、戦争という悪をこの国から遠ざけるのに役立っている筈だ、と。

しかしそれは間違いでした。多数決に支配されるこの国の議会制民主主義は、戦争は絶対的な悪ではなく、必要悪、である、と考える恐ろしい指導者を選出しました。気がつくと、芝居を観てくださるお客様の数も、じりじりと減っていました。「暗くて重い戦争の芝居は観たくない」と言われました。そして今や、平和憲法の存続を問う国民投票実施は、決して夢物語ではありません。

でもひょっとしたら、本当にひょっとしたらですが、そういった現実こそが、これまでの思い上がりをきちんと自己批判し、表現としての面白さをちゃんと兼ね備えた芝居作りに向かう機会を、私に与えてくれるのかもしれない。この原稿を書かせていただいて、かすかにそんな希望が湧いてきたところです。ありがとうございました。

逃げ出さずに、時代に向きあえるか?

久保田　明
（演出家・劇団名古屋）

劇団名古屋は今春、真船豊1934年作の『鼬（いたち）』を上演した。没落旧家、家屋敷そっくり金貸しの手に渡ろうとする日を舞台に、なおも家にしがみつくおかじ、出稼ぎ先の南洋から駆け付ける一文無しの息子萬三郎、女工哀史さながらの紡績でのし上がった叔母おとり、最後の取り分を少しでも多くと群がる村人、肉親すら相食む非情陰湿な人々の姿が描かれる。それは急速な変貌、農から金本位に変貌する農村の構造、日本のゆがみを象徴する。その行き着く先は戦争（であり、あの敗戦）。その道程が現代にだぶってこないかというのが上演意図であった。

真船豊は『鼬』7年を経て、登場人物も同じ『鼬』続編の『山参道』を書く。新生新派によって上演される。南洋に再度渡った萬三郎が大成功し帰郷するところから始まる。『鼬』で家を騙し取り、おかじを悶死させたおとりは、今度は自分が追い出されるのではと戦々恐々。ところが萬三郎は、おとりを責めることなく、小学校に二宮尊徳の石像を寄贈し、母親おかじが眠る山の上の墓地への参道整備の金を村に寄贈して三度南洋に旅立つ。太平洋戦争開戦の年の作品である……。

演劇は、その日、その場を共有する人たちの間でのみ成立する。とんでもない間違いを仕出かしてはいないかという不安をいつも孕みつつ、それでも逃げ出さずに時代に向きあおうと思う。カッコ付きの平和が闊歩しかねない危うい時代に。

真の平和を次代へ手渡すために

栗木　英章
（劇作家・劇団名芸代表）

一昨年「ピースあいち」を題材に「平和のかけ橋」として劇化上演しましたが、あらためて多岐にわたる諸活動へ敬意を表します。

さて、被爆・敗戦70年、節目といわれる今年は少々穏やかに来し方を振り返れると思っていた。私事だが昨年大病を患い、限られた余命と向き合っているせいかもしれない。

ところが安倍暴走内閣が「戦争法案」をしゃにむに進め、憲法9条に反して日本を再び戦争する国へ逆行させようとする危険な状況に当面して、まず唖然とし、腹の底から怒りが湧き起こってきた。全国でも連日大きな反対運動がうねりを成してきている。国会内でも共同行動が求められるが、何といっても国の行方を定めるのは私たち国民の「平和憲法守れ、戦争許すな!」の幅広い統一行動であろう。

私の父は戦地から辛うじて帰還し、貧乏のなか働き過ぎて戦後間もなく病死、以降母子4人の厳しい暮らしを体験してきた。それがベースとなって自分なりに反核・平和を希求する戯曲を書き、この地で半世紀余上演し続けてきたが、時折、空しさに襲われる。しかし私たちの絶望は戦争強行勢力の思う壺となる。今や感慨にとらわれ立ち止まっている時期ではない。まずは周りへ語りかける、手紙を出す、署名を広める、新聞等への投稿（中日「平和の俳句」の力強いこと!）、街頭での宣伝活動…各人の立場でやれることからなんでも実行しよう。真の平和を次代へ確実に引き継いでいくために！

「ピースあいち研究会」報告

今年4月、「ピースあいち研究会」は、これまでの慣行などを“申し合わせ”にまとめ、再出発しました。新たな主な申し合わせ事項は、①活動の幅を広めるため年会費制を導入する、②外部講師をお招きして知見を広める、といったことです。会員数は25名で、新会員のご参加を歓迎します。

6月14日には、慶應大学名誉教授の松村高夫さんを初めての外部講師としてお迎えし、“戦争責任といま日本が問われていること”の演題でお話を聞きました。会員以外の方を含め29名の参加者がありました。

専門の歴史家にはできない“下からの歴史把握の重要性と、全体を把握するCommon Senseを持つ市民こそが事実を捉え得る”と述べた上で、“歴史を支配・被支配の関係で捉えることの重要性”も指摘され、権力が公式に罪を認めようとしない事例、アルメニア人虐殺、731部隊の実態を詳しく紹介されました。

また、「ピースあいち研究会」にエールをくださり、元気づけられました。

報告 写真展「平和を紡ぐ1000人の女性」4月7日（火）～5月10日（日）

2005年度のノーベル平和賞を前に、平和に貢献する世界の1000人の女性たちを推薦するプロジェクトがありました。その女性たちを紹介する本の出版とともに、世界各地で開かれてきた写真展です。

日々暴力や破壊行為に立ち向かい平和のために立ち上がる女性たち。女性たちは敵対グループの間に入って交渉し、戦争による残虐行為の報告をし、幼い少女たちの性器切除と戦い、貧困や児童労働を糾弾し、性的搾取やドメスティック・バイオレンスに立ち向かっています。こうした勇敢な女性たちは自らの安全を顧みず行動しています。

その行動は、日本で暮らす私たちの日々の生活からは考えられないような、勇気を必要とするものでしょう。少しでもそれが伝わればと思い、本より言葉を抜き出し写真とともに掲示しました。

3階展示室の壁を埋め尽くす女性たちの写真。訪れた方々はゆっくり時間をかけて見入っていました。

報告 企画展「戦後70年：今、振り返る沖縄戦と日本軍」5月19日（火）～7月4日（土）

「ピースあいち」では毎年6月23日の「沖縄の日」の前後に展示会などを開催してきました。今年の展示は、70年前に地上戦になった沖縄戦とそこでの日本軍の役割に焦点を当て、本土とは異なった沖縄戦の実相を明らかにしようとするものです。

展示構成は【第1部】沖縄戦の実相、【第2部】沖縄戦―体験を今に伝える人々、【第3部】沖縄の今を伝える、となっています。独自に作成した展示パネルのほかに、沖縄県平和祈念資料館から借りた体験者が描いた沖縄戦の絵画や、南風原文化センターから借りた津嘉山日本軍壕遺物が多数展示されました。

開催期間中には、900人を超える多くの方々が来館され、資料や絵画をご覧になりました。

また2階の廊下ギャラリーでは関連企画として、辺野古写真展実行委員会の提供による「辺野古写真展」も開催されました。

報告 南山中学・高校生による朗読の集い「あの夏の空に届け」7月4日（土）

南山国際中学高校演劇部の学生8人と保護者有志による朗読会は、50数名の聴講者が1階・交流広場を埋め尽くすほどでした。若い人が多く、小さな子ども連れの方もおられました。

広島原爆投下時に小学生だった子どもたちの作文の輪読とバイオリンの二重奏のあと、感想文を送られた80歳の被曝者の手紙も紹介されました。またボスニア・ヘルツェゴビナでの地雷時による殺傷も紹介され、フィナーレは「地雷ではなく花を下さい」の合唱で終わりました。

報告 「民間沈没船と船員の記録」展 7月7日（火）～7月18日（土）

アジア・太平洋戦争では、多くの民間人のほかに、商船や漁船の乗組員たちも大きな犠牲を強いられました。6万名以上の命が喪われ、その戦死率は43%と陸海軍軍人の1.5倍近いものであったとされます。当時の商船や漁船は、海軍艦艇と同じく危険な海を渡り、最前線に赴いて戦い、そして果てていったのです。しかし、その犠牲と遺族の苦しみは、戦後顧みられることも少ないままでした。

どうして商船や漁船が遠く異郷の海で沈まなければならなかったのでしょうか。どうして乗員たちは死ななければならなかったのでしょうか。そしてその事実は今生きる私たちに何を訴えているのでしょうか。それらを考えていただける展示会になりました。

竹内浩三ゆかりの地を訪ねる旅

6月7日（日）、「浩三のふるさと　山田を訪ねて、山田で学ぶ」という、ボランティア班主催の初めての館外研修が行われた。この研修は、7月21日（火）からの企画展「戦争と若者　竹内浩三の詩とその時代」開催前に、浩三の生まれ育った場所を訪れ、浩三をさらに身近に感じようというのが狙いです。

早朝8時にボランティアたち総勢38名が名東区一社をバスで出発。バス内では、伊勢高校出身の桐山講師から、「山田と伊勢」についてのうん蓄を聞きながら一路伊勢へ。伊勢市に着くと、赤門三ツ星会の岡田美代子さん、藤田明さんが同乗。山田弁も交えた地元の方でなければ、話すことのできないガイドをしていただきながら、赤門寺正壽院、生家跡など浩三ゆかりの場所を見学しました。

昼は宇治山田駅前の老舗割烹「大喜」にてちょっと豪華な昼食。そこへ浩三さんの姪の庄司のぶ代さんも加わり、食後、徒歩で浩三がなじみの場所である「うどん屋」や「びっくり世古」「旧明倫国民学校跡」などを外宮さんまで岡田さんの名調子のガイドつきで散策。

その後、伊勢市障害学習センター「いせトピア」の一室をお借りして、藤田さん、庄司さんから浩三さんのお話を聞き、質疑応答のあと田中伸一さんによる浩三の詩を基にしたギター演奏付きの歌と語りなど、70分間にわたる交流会が行われました。

締めくくりは、伊勢志摩スカイラインの眺望を楽しみながら、朝熊（あさま）山頂の金剛證寺にある「浩三の墓」におまいりし、現地での研修を終え、帰路は浩三の好んだモーツアルトの「K40」を子守歌がわりに聞くなど、浩三一色の研修でした。

晴天に恵まれ　ピースまつり
5月10日（日）

開館8周年の「ピースまつり」は晴天に恵まれ、300人を超える方にご来館いただきました。まずはバザー。その後は、ボランティアが丹精込めて捏ねたさぬきうどんコーナー、カフェ、折り紙による「平和コマ」つくり、常設展のガイド付き案内などボランティアによるおもてなし。そして今回も「おもちゃ病院」「国連WFPサポーターズなごや」など、7団体が参加してくださいました。この様子はリアルタイムで「ピースあいち公式ツイッター」が配信。それを見て駆けつけてくださった方もいました。

資料館探訪 13

悪魔の飽食の舞台－「侵華日軍第731部隊罪証陳列館」

哈爾濱（ハルビン）の南、約20キロにある平房（ピンファン）に、旧日本軍の第731部隊があった。そこには現在「侵華日軍第731部隊罪証陳列館」と、日本人はビビってしまうような名前の付いた資料館がある。

731部隊の基地は6キロ四方の広大な土地に飛行場から、鉄道引き込み線と、高圧電流を張り巡らした塀と空堀（からほり）があったと言われる。日本軍が撤退するとき証拠隠滅のために破壊し、焼却したと言われるが、半壊したボイラー室、引き込み線等々が残っている。線路には雑草が生えているが、アウシュビッツの引き込み線を彷彿（ほうふつ）させる。当時の建物である本館と資材館には実験器具などの遺品や生体実験の様子を再現した蝋人形や細菌爆弾などが展示されている。当時のものが廃棄されたため残った資料などから推測してつくられたものが多い。資料館の出口の廊下には死者名が記されたプレートがはめ込まれている。「丸太」として葬られるよりは、生きていた「人」として葬られた方が救いがある。　（N）

総会の報告

会員の拡大、確保を申し合わせた。

6月27日（土）、当館1階ホールで2015年度の通常総会を開いた。議事に先立って、森嶌昭夫理事長は次のように述べられた。「いま国会では集団的自衛権について議論が続けられていますが、どう見ても今の憲法から見て、私の考え方では認容できません。この総会では、是非とも戦争を起こさないためには、どうしたらいいのか。議論をしていただきたい。」

このあと議事に入り、2014年度の事業報告・決算報告・監査報告を承認。次いで2015年度の事業計画と予算を審議して可決。さらに役員（理事・監事）の選任が議題に供され選任。会員の拡大、確保を申し合わせて総会を終えた。

知名度深まる「ピースあいち」

「ピースあいち」の知名度が全国区になりつつあります。団体参観は、西は大阪・東は東京から来ています。昨年は大阪の寝屋川中学校が修学旅行で来て、千羽鶴で作った花束を寄贈してくれました。個人では北海道から沖縄まで、各地から来られています。

「ピースあいち」では、パネルや所蔵品の貸し出しもしています。パネルは『戦争と子どもたち』や『戦争と動物たち』が人気で、沖縄をはじめ関東地方にまで貸出されています。特に、今年は戦後70年で、各地から問い合わせがあります。

寝屋川中学のみなさんから贈られた千羽鶴の花束

月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン（無料）」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください！

会員1,000名以上を目標に！

「ピースあいち」の基本財源は、大人300円（子ども100円）の入館料と会員の皆さんの会費（正会員=6000円/賛助会員=3000円）です。「ピースあいち」開館以来数年間、正会員・賛助会員合わせて約800名で推移してきましたが、会員の高齢化などで減少してきました。

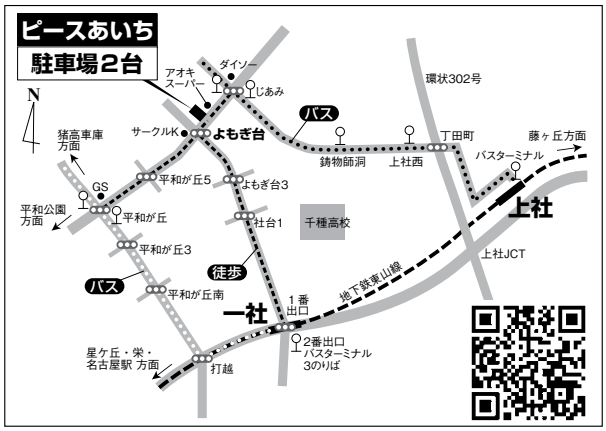
この現状に危機感をいだき、私たちは昨年夏から会員拡大に取組みました。その結果、今年6月末で、正会員344名/賛助会員636名、合せて980名となりました。ご協力、ありがとうございました。

しかし、「ピースあいち」の年間経費約1,200万円にはまだ遠く及びません。自主財源の確立は、会員の拡大です。今後とも会員の拡大につながる活動ができるよう努めていきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

【ピースあいちの利用案内】

- 開 館 日　火曜日～土曜日
- 開館時間　午前11時～午後４時
- 休 館 日　日曜日・月曜日・年末年始
- 入 館 料　大人 300円　小中高生 100円
- 2階の常設展示室のほか、1階の「現代の戦争と平和」というテーマの常設展示。ほかにも準常設展示として「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」があります。1階には戦争に関する図書や戦争体験談のDVDライブラリーもあります。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります（300円）。他に障がい者用が1台分あります（無料）。

■「ピースあいち」への交通のご案内



●編集後記●

今年は「戦後70年」という節目の年である。マスメディアは年頭から、この言葉を添えての特番を企画し、特集記事を組んでいる。当館でも年頭から「戦後70年」と銘打っての企画展を実施してきている。今後のものも含めて11を数える。

6月23日、沖縄の全戦没者追悼式で、沖縄県立与勝高校3年の知念捷さんが自作の詩を朗読した。祖父の姉と戦死したその夫の体験を描いた作である。彼は「みるく世（ゆ）がやゆら」と呼びかけた。これは沖縄の言葉で、「平和でしょうか」という意味である。私たちは、この問いかけに具体的な行動で応えたいと思う。　（S）